

訳注「中国小説類の韓来記事」

松原, 孝俊
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5355>

出版情報：言語文化論究. 5, pp.167-187, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

訳注「中国小説類の韓来記事」

原著 李 能 雨 編集・翻訳・訳注 松 原 孝 俊

隣接する大国である中国文化から韓国文化が莫大な影響を受けてきたことは、周知の事実である。しかしその事実を証明する「記事」は、たとえ中国小説類の韓来記事だけにテーマを絞ったとしても、多くの資料を提示しえないのが現状である。文献の保存と国難との関係もあるが、一般的な社会的思潮が小説などを忌避したので、こうした記事を書き残さなかったと推測すべきであろう。

李圭景の『五洲衍文長箋散稿』〈訳注1〉を見ると、「大東書厄辨證説」という論説がある。わが国の歴史上の十大書厄を論じたものである。これによると、第一、第三、第五、第七の厄は、外敵（唐・元・倭・胡）によるもの、第二、第八は内乱（新羅末・李适の乱〈訳注2〉）に起因するもの、残りの第四、第六、第九、第十は失火もしくは無知による書厄であるという。

〔資料1〕『五洲衍文長箋散稿』巻5、1B
～2B 〈訳注3〉

「書之有厄豈特中國而已也、書者古今之絶寶、或爲造物之所猜、故必有其厄而、我國亦有書危略計之則十厄也、唐李勣既平高句麗、聚東南典籍於平壤、忌其文物不讓中朝、舉而焚一也。新羅之末甄萱據完山州、輸實三國之遺書、乃其敗也。蕩爲灰燼二也。高麗之屢經兵焚、每多殘缺三也。本朝明宗癸丑景福宮火、思政殿以南皆焚、歷代墳籍并燬四也。宣祖壬辰倭奴之入寇也。亂民與倭賊放火、竟燒五也。仁祖丙子清軍來侵、亂氓放火、燒燼殆盡

六也。壬丙之亂、皇明天將及倭虜搜括典籍之在於京鄉民間者、并擱載而去七也。仁朝甲子、逆适以關西門師舉兵、犯闕而如干遺燼、復入消滅八也。國俗不貴墳典、毀爲還帑、糊爲塗壁、潜銷暗燬九也。藏書家、懸金購取、什襲秘置、而亦不自讀、更不借人、一入无出、迷鬱積歲、竟爲蠹鼠之所侵蝕、僂隸之所竊賣書、无完帙十也。愚嘗感慨不已、竊以爲書厄中藏書爲最者是也。書之毀爲還帑、糊爲壁褙、當爲平昔第一厄會、而以收藏爲厄之最者、其義甚切、還帑則非本國楮帑、不得還造、塗壁亦然、而至於藏書則艱購燕市、乃是唐裝也。帑品甚脆、易受朽傷蠹鼠偏蝕、一或毀破更難備實、故云、然果若收藏如中原范氏天一閣、歷世兵火幸得無恙、巋然獨存、俾此書種傳于國內則、豈敢以收藏經典爲書厄之最也哉。人或歸之於妄然、亦格言也。」

この十の厄の内、第九の無知による還紙、塗壁などは嘆くほか無いが、第十の蔵書家による厄は李圭景の最も憎悪するところであった。数々の紆余曲折があったが、ともかくわが国は半万年（5000年）の歴史を有している。文籍が出現してからでも、千有余年にならんとしている。この時空の中で、小説はどのように迎えられたのであろうか。前記したようにこうした事実を探しつつ、またそれと付随する問題に取り組むことが本研究の目的である。その付随する問題とは、たとえば次のようなテーマである。①上古説話の形成におい

て中国からの影響の有無、②わが国の軍談類小説に与えた中国の同類作品の影響説に対する反省、③『洪吉童伝』と『水滸伝』の相関説に対する批判、④『西廂記』と『春香伝』を比較したときの諸問題などである。

[1] 山海経 (18巻)

中国の太古の神話・伝説が散見できる一種の巫術書である山海経は、おそらく秦・漢代に成立したと考えられている。わが国に輸入された年代記録は未詳である。日本の記録によると、この本を百済から輸入したと言うが、その時期はAD 3世紀 (284年) 頃である。

[資料2] 『和漢三才図會』

「晋大康五年、應神十五年秋八月丁卯、百濟王遣阿直岐者、貢 易經、孝經、論語、山海経」 <訳注4>

なおこの『山海経』については来韓以来千余年経過するのにも拘らず、史庫の中に大切に保存されていたようで、李朝時代の太宗12年 (1412) 8月己未の次のような王命記録が残されている。

[資料3] 『李朝実録』太宗12年 (1412) 8月己未の条

「命史官金尚直、取忠州史庫書冊以進、小兒巢氏病源候論・大広益会玉篇・鬼谷子・五臓六腑図・新彫保童秘要・広濟方・陳郎中薬名詩・神農本草図・本草要括・五音指掌図・広韻・經典釈文・国語・爾雅・白虎通・劉向説苑・山海経・王叔和脈訣口義弁誤・前定録・黄帝素問・武成王廟讚兵要・前後漢著明論・桂苑筆耕・前漢書・後漢書・文粹・文選・高麗歷代事迹・新唐書・冊府元龜」 <訳注5>

『山海経』をはじめとして、当時の中国に

は『穆天子伝』『楚辞』『天問』『燕丹子』『蜀王本紀』『吳越春秋』『越絶書』などの太古説話関係の文献が存在したが、これらの文献の来韓記録はない。『朝鮮小説史』を上梓した天台山人 (金台俊) は、わが国の『鷄林雜編』『花郎世紀』『新羅殊異伝』などの作品が、中国の『杜陽雜編』『甄異伝』『述異伝』『異苑』『神異伝』などからの影響を受けて成立したと思いつきで論ずるものの<訳注6>、これはたんなる推測にすぎない。しかしながらそれ以来、『国文学史』にはこうした連想からの推測記述がよく見受けられるものの、推理の前には作品間の綿密な比較がまず成されていなければならない。

[2] 搜神記 (20巻) ほか

魯迅の『中国小説史略』には、漢・六朝代の小説関係文献として、

『十洲記』『漢武故事』『漢武洞冥記』『漢武帝内伝』『西京雜記』『飛燕外伝』『雜事秘辛』『列異伝』『博物志』『搜神記』『搜神後記』『異苑』『統齊諧記』『冥詳記』『神異記』『拾遺記』 <訳注7>

などが列举してあるが、わが国に輸入された記録が残されているのは、ただ『搜神記』だけである。11世紀初めに李資義が宋から持ち帰ったのだが、そのときの数千巻におよぶ書物のリストは次の通りである <訳注8>。

[資料4] 『高麗史』世家、巻10、23A～25B (宣宗8年6月丙午の条) <『高麗史節要』巻6、宣宗大王8年6月丙午の条参照>

「(高麗) (宣宗八年六月) 丙午、李資義等還自宋、奏云帝聞我國書籍多好本、命館伴書所求書目錄授之、乃曰雖有卷第不足者亦須傳寫、附來百篇、尙書、荀爽周易十卷、京房易十卷…[略]…東觀漢記一百二十七卷、謝承後漢書一百三十卷…[略]

…新序三卷，說苑二十卷，劉向七錄二十卷，劉歆七略七卷…〔略〕…淮南子二十一卷，公孫羅文選水經四十卷…阮孝緒七錄，孫盛晉陽秋三十三卷…于寶晉記二十二卷，十六國春秋一百二卷，魏澹後漢書一百卷…教珠英一千卷…周處風土記一卷，張揖廣雅四卷…通俗文二卷…古史孝二十五卷，伏候古今注八卷…三輔黃圖一卷，漢官解詁三卷…益部耆舊傳十四卷，襄陽耆舊傳五卷，稽康高士傳三卷…于寶搜神記三十卷…今書七志十卷，世本四卷，申子二卷，隋巢子一卷，胡非子一卷，何承天性苑高士廉氏族志一百卷，十三州志十四卷，高麗風俗紀一卷，高麗志七卷…晁氏新書三卷，風俗通義三十卷，汜勝之書三卷…桓譚新論十卷…山公啓事三卷…古今詩苑英華集二十卷，集林二十卷，計然子十五卷」

この来韓文籍の中に，高麗文人たちの小説創作意欲を知らず知らずのうちにかきたてる刺激的な文籍もいくつか含まれている。たとえば史書類，諸子類，伝記類，風土類などの典籍には，ノンフィクションを越えた叙述がなされているからである。もっとも本稿の中で提示するリストは，わが国の文献に名前を残す物を拾い集めたものであるが，かりに記録に無いからと言って，その本が輸入されなかったと言うわけではもちろん無い。

[3] 文苑英華 (1000巻)

唐代の伝記類も若干収録されているこの本は，宋の太平興国7年(982)に編刊されたものであるが，わが国への輸入はそれよりも約100年後の1090年の事であった。

[資料5] 『高麗史』世家，宣宗7年12月壬辰
「宋賜文苑英華集」〈訳注9〉

[4] 太平御覽 (1000巻)

この本には中国古代説話および六朝の鬼神志怪などを収録しているが、『文苑英華』にわずか5年先立つ977年(宋太平興国2年)に撰集されたものである。わが国にもたらされた時期は，次に見る通りに1～2世紀後の1101年および1192年であった。

[資料6] 『高麗史』卷11，世家，肅宗6年6月丙申

「王暉・吳延寵 還自宋，帝賜大平御覽一千巻」

[資料7] 『高麗史』列伝卷第9，96巻38丁B～39丁A

「吳 延寵愛，海州人，家世寒素少貧賤力学善属文，…登第累進，起居郎兵部郎中，肅宗五年，與尙書王暉，如宋 賀登極，以朝旨購大平御覽，宋人秘不許，延寵上表懇請，乃得，及還王曰此書文考嘗求之不得，今朕得之，使者之能也。副僚佐，並加爵賞，拜延寵中書舍人，」

この記事によると，「太平御覽」は当時国内に存在しなかったようであり，輸入されたことによって大変に喜ばれたという。

この文籍の次の来韓は，1192年(明宗22年)であった。

[資料8] 『高麗史』世家，卷20，30—B，(明宗22年8月癸亥)

「宋商，来献太平御覽，賜白金60斤，仍命崔誥，校讎訛謬」

崔誥をして校讎訛謬させたのは，すなわち国内覆印・普及を意味していると言って良い。

[資料9] 『高麗史』列伝卷12，卷99，5丁B～6丁A

「誦、明宗時爲右司諫、…判秘書省事、與吏部尙書鄭國儉等雋校增續資治通鑑、又刊正太平御覽…」

ところで前掲した『文苑英華』そして『山海經』をはじめとして、この『太平御覽』はわが国に輸入されてから、たいへんな稀覯本となつたらしく、李朝時代の成宗21年(1490)にはこれらの文籍を全国に広く求める通達が各道の観察使に下された。

[資料10] 『李朝実録』成宗21年2月丁酉

「下書諸道觀察使曰、東來歴史詳節、陸賈新語、楚漢春秋、唐臣奏議、魏略、陳后山集、韋蘇州集、司馬溫公集、司馬先生家範、太平御覽、山海經、唐鑑、管子、文苑英華、文章正印、等冊、廣求道内民間上送」

しかしながら15世紀後半になると、早くもこれらの文籍の所在が確認できない状態となつたと言つてわけであるが、一方王朝の史庫で大切に保存されたものもあつた([資料3]参照)。

[5] 太平広記(500巻)

この文籍は中国から輸入されてから後、高麗・李朝の文人の間に広く知られていた物であつた。『太平広記』は宋の太平興国2年(977)年に成立したが、『文苑英華』および『太平御覽』の編刊とほぼ同時期である。『文苑英華』や『太平御覽』が中国で刊行されてから約1~2世紀経過してから、わが国に輸入されていることから推定して、『太平広記』もおそらく同時期に輸入されたと考えても良いのかもしれないが、記録は一切ない。ただ、高麗の高宗(1214~1259)代に制作された『翰林別曲』を見ると、この文籍の名が載っており、おそらく宋の商人から『太平御覽』を購入し

た1192年とは遠く離れない時期に来韓したようである。

[資料11] 『高麗史』志第25, 樂2, 卷71—41A

「翰林別曲…唐漢書、莊老子、韓柳文集、李杜集、蘭臺集、白樂天集、毛詩、尙書、周易、春秋、周載禮記…太平廣記 四百餘卷、偉 歷覽景何如…」

『太平広記』に関する記録は、高麗時代にはこれ以上発見できないが、李朝に入ると、いくつか目にすることができる。世祖8年(1463)正月丙申に君臣の間で話題となつたようである。

[資料12] 『李朝実録』世祖8年(1463)正月丙申

「上與中宮御仁政殿、王世子與宗親宰樞進豊呈、上謂梁誠之曰卿知太平廣記、其語廣記中之言、誠之啓、昔唐宰相蘇瓌・李嶠二兒皆童年、中宗召置於前、賜與甚厚、因語曰爾讀書何事最好、瓌子頰曰惟木從繩則正后、從諫則聖嶠子曰斯朝涉之脛剖、賢人之心、中宗曰蘇瓌有子、李嶠無兒、上笑曰卿何謂因事勸戒者也」

この頃に、この『太平広記』の抄録が成任(1421~1484)によってなされ、刊行されたようである(訳注10)。

[資料13] 『備齋叢話』卷10(『大東野乘』卷2)

「伯氏文安公、好學忘倦、嘗在集賢殿、抄録太平廣記五百卷、約爲詳節五十卷、刊行於世」

[6] 酉陽雜俎

この文籍は唐代のものであるようだ。ところが明代の胡應麟の『筆叢』によると、原本はいちはやく破盪してしまい、『太平広記』か

ら抄出したものが今日の『西陽雜俎』であるという（『四庫全書』簡明目録）。ともあれわが国に輸入された時期は明確でないが（訳注11）、李朝の『成宗実録』によると国内刊行の記録が次のようにある。成宗24年（1493）12月戊子のことである。

[資料14] 『李朝実録』成宗24年12月戊子

「弘文館副提學金謙等上劄子曰、伏聞頃者、李克墩爲慶尙監事、李宗準爲都事時、將所刊西陽雜俎、唐宋詩話、遺山樂府及破閑、補閑集、太平通載等以獻、既命藏之內府、旋下唐宋詩話、破閑、補閑等集、令臣等略註歷代年號、人物出處以進、臣等竊惟帝王之學、當潛心經史、以講究修齊治平之要、治亂得失之際耳、外此、皆無益於治道、有妨於聖學、克墩等、豈不知雜俎、詩話等書、爲怪誕不經之說、浮華戲劇之詞、而必進於上者、知殿下留意詩學而中之也。人主所尙、趨之者衆、克墩尙爾、況媒進者乎、若此怪誕戲劇之書、殿下當如謠聲美色而遠之、不宜爲內府秘藏、以資乙夜之覽、請將前項諸書、出付外藏、以益聖人養心之功、以杜人臣獻諛之路。傳曰、如爾等之言、以西陽雜俎爲怪誕不經、則國風、在傳所載、盡皆純正歟、近來印頒事文類聚、亦不載如此事乎、若曰人君不宜觀此等書、則當只讀經書乎、克墩、識理大臣、豈知其不可而知之哉、前者柳輕爲慶尙監」

『西陽雜俎』の禁刊を願う経筵の臣下たちの上筋に対して、それならば経書だけを読めと言うことかと反問する王の言に、微笑を禁じ得ない。『西陽雜俎』などの国内覆刊に関する君臣あるいは閣僚間に不協和音が響いていたのである。

[資料15] 『李朝実録』成宗24年12月

①

「己丑、傳于承政院曰昨日弘文館所啓是耶非耶、都承旨金應箕等啓曰…如雜書但當開刊而已、不宜進也。弘文館所啓以此也。傳曰人各有類、賢者雖見不經之書、豈可變而爲惡、不賢者雖見正大之書、何能爲善、爲善爲惡在人耳、善惡皆當觀之、以爲勸戒、李克墩非敢希予旨也。時適開刊故獻之耳、弘文館若曰克墩不宜進則可、獻諛則不可、且請出內藏、尤爲不恭、若然則、內藏雜書盡出之耶…」

②

「癸丑…吏曹判書李克墩來啓、太平通載、補閑等集、前監司時、已始開刊、劉向說苑新序、非徒有關於文藝、亦帝王治道之所係、西陽雖雜以不經、亦博覽者所宜涉獵、臣令開刊、前日諸道新刊書冊、進上有命、故進封耳、未知何書有關於詩學、而指臣爲中之乎。」

書冊の開刊とその進上とを別個に見ようとする意見、読者を王に限定する考え方など、どれも理屈はつくけれども、成宗王の意見は偏狭的にすぎないかとも思われる。いずれにせよ『西陽雜俎』自体は当時流伝された物でもないし、また内容にしても目新しいものはないが、この續集の巻1にはわが国の民族説話の一つである新羅の「傍龜兄弟金錐鼻長説話」が収録されている。

[7] 世説新語（3巻）

南朝宋の劉義慶の撰であるこの雑著は、後漢以後東晋までの軼事瑣語に至るまで収録したものである。編撰年代は12～3世紀。この本がわが国に輸入されたのは、李宜顥（1669～1747）の『陶谷集』によると、中国の使臣であった朱之蕃の来朝時（宣祖39年〈1606〉）であったと言う（訳注12）。

[資料16] 『陶谷集』

「…劉義慶世話…誠藝林珍寶也。朱天使之
蕃携來，贈西峒，遂爲我東詞人所欣覩焉」

これは中国で編刊されてから4～5百年後のことである。このころ光海朝の許筠(1569～1618)の『閑情録』に引用された典籍に、『世説新語補』と『明世説新語』の名が記されている〈訳注13〉。

[8] 三国志演義

この作品は14世紀ごろに出現したもので、その来韓時期ははっきりしないが、『李朝実録』宣祖2年(1569)6月の記録によれば、「此書出来未久」とある。関係記事は次の通りである〈訳注14〉。

[資料17] 『李朝実録』宣祖2年6月壬辰

「上御夕講于文政殿，進講近思錄第二卷，奇大升進啓曰，頃日張弼武引見時，傳教内張飛一聲走萬軍之語，未見正史，聞在三國志衍義云，此書出來未久，小臣未見之，而或因朋輩間聞之則，甚多妄誕，如天文地理之，書則或有前隱而後著，史記則初失其傳後難臆度，而敷衍增益極其恠誕，臣後見其冊，定是無賴者哀集雜言，如成古談，非但雜駁無益，甚害義理，自上偶爾一見甚爲未安，就其中而言之，如董承衣帶中詔，及赤壁之戰勝處，各以恠誕之事，衍成無稽之言，自上幸恐不知其冊根本故敢啓…又啓曰…三國志衍義則恠誕如是，而至於印出，其時之人豈不無識，觀其文字亦皆常談，只見怪僻而已…」

韓国文学史においては、この『三国志演義』は軍談類小説(イヤギチェック)や古代小説の出現に多大な刺激と影響を与えたと叙述されている〈訳注15〉。なるほど『三国志演義』の一部を抽出して、「赤壁大戦」「山陽大戦」「関

雲長実記」「諸馬武伝」「姜惟実記」「黄夫人伝」などの軍談類小説が成立している。しかしそのほかの作品までもがこの『三国志演義』の影響下に生まれたと見る必要はない。『三国志演義』のどのような文学的要素が移入されたのかを正確に研究して始めて、こうした論議が可能になると思われる。というのも中国において『三国志演義』のような作品が独自に作り出されたように、韓国の戦争文学の成立を論じるときも、なにも中国からの影響を前提とする前に、独自に産出されたとも考えて見るべきだからである。両国間の文学の比較において、たえず注意しなくてはならないことは、偶然な一致であったり、類似した内容であったりしたとき、すぐさま短絡的に結論を求めることである。事実、軍談類小説の一つである『壬辰録』類は、壬辰倭乱(註…文禄慶長の役)の国難に直面したわが祖先たちの文学的想像力の産物であるが、これをもってしてわが民族の文学的想像力が貧困であると誰が言えようか。

『趙雄伝』『劉忠烈伝』『張国振伝』『權益重伝』『林虎隠伝』『大成竜門伝』『李大鳳伝』〈訳注16〉などは確かに舞台や時代などを中国に求め、多くの武勲を上げているが、だからといってこれらは『三国志演義』とはまったく無縁な小説類である。むしろわが国の伝説型人物を取り扱った『林慶業伝』『李舜臣伝』『金徳齡伝』『権慄将軍伝』『郭再祐伝』『西山大師伝』『泗溟堂実記』などは、他の作品群と異なり「為国盡忠」のみを内容としているので『三国志演義』との顕著な類似を示している。

[9] 水滸伝

14世紀ごろに作られたと言うこの作品は、わが国の『洪吉童伝』〈訳注17〉の傍祖の位置を占めると考えている。とはいえこの点も今後の研究課題の一つである。

『水滸伝』の来韓記事は探し出せないが、た

だ許筠の『閑情録』にこの作品を一読し、感嘆したとあるだけである〈訳注18〉。

[資料18] 『閑情録』巻17, 「觴政」(十之掌故)

「…傳奇則水滸傳・金瓶梅, 爲逸傳, 不熟此傳者, 保面饜腸, 非飲徒也。」

[10] 西遊記

魯迅の『中国小説史略』によると、最初の『西遊記』の出現を明代(1368~1661)と見ている。わが国に輸入された時期は不明であるが、上記した許筠の『惺所覆韻藁』に「西遊記跋」があるのみである〈訳注19〉。

[資料19] 『惺所覆韻藁』巻13,

「余得戲家說數十種…有西遊記, 云, 出於宗藩, 即玄奘取經記, 而衍之者, 其事蓋略見於釋譜及神僧傳, 在疑信之間而今其書特假修煉之旨, 如猴王坐禪即煉己也。老祖宮偷丹, 即吞黍珠也。大鬧大宮, 即煉念也, 待師西行, 即搬運河車也。火炎山紅孩, 即火候也。黑水通天河, 即退符候也。至西而東還, 即西虎交東龍也。一日而回西天十萬路, 即攢簇周天數於一時也。雖支離漫衍, 其辭不爲莊, 語種種, 皆假丹訣而立言也。固不可廢哉, 余特存之, 修真之暇, 卷則以攻睡魔焉」

あえて跋を書き、簡略にでも内容を紹介し、その上で『神僧伝』から得た知識と比較している態度から推測して、おそらく許筠としても初めて『西遊記』に接したのであるまいか。

[11] 金瓶梅

明の三大奇書として名高いのは、『水滸伝』『西遊記』そして『金瓶梅』であるが、この『金瓶梅』にしてもわが国の記録は残っておらず、僅かに許筠の『惺所覆韻藁』に言及す

るのみである〈訳注20〉。

[12] 剪燈新話

この作品は明の永楽19年(1421)に作られたが、韓国の世祖代の金時習が著した『金龜新話』に絶大な影響を与えたとされている。それが事実であるならば、この作品だけが例外的に、出版されてからまもなくしてわが国に輸入されたことになる。記録には燕山君12年(1505)4月壬戌の伝教で、この作品の買來を命じている。そして印進するという記録は、次のものが初見であるようだ。

[資料20] 『李朝実録』燕山君12年4月壬戌
「傳日, 剪燈新話, 剪燈餘話, 效顰集, 嬌紅記, 西廂記等令謝恩使買來。」

この作品は燕山君によって輸入されたが、あわせて印出もされたようである。臣下にこれを下賜した後、次のように言っている。

[資料21] 『李朝実録』燕山君12年4月辛酉
「下剪燈新話, 曰, 序云, 不正之君所好者, 唯聲色歌舞, 而上下相蒙, 政治廢弛, 國勢不振, 豈因聲色歌舞, 而國必亡乎。由上下相蒙而然耳, 前朝之君, 亦有如此者乎」

壬辰倭乱(文祿慶長の役)の時に、数多くの書籍が倭寇によって強奪されたが、本書を求めた記録が仁祖19年(1641)正月に見出される〈訳注21〉。

[資料22] 『李朝実録』仁祖19年正月辛巳

「倭人求四書章句, 楊誠齋集, 東坡, 剪燈新話, 我國地圖, 朝廷賜以東坡, 剪燈新話, 餘皆不許」

この時に、本書が日本に渡ったのである。

[13] 稗説類

ここでは年代順に通覧していくこととする。まず11世紀の初めに、高麗の李資義が宋から持ち帰ったと言う典籍の中には、前掲したように〔資料4〕、1 劉向七録(20巻) 2 淮南子(21巻) 3 公孫羅文選水経(40巻) 4 阮孝緒七録 5 周処風土記(1巻)などの稗説類が含まれていた。

次に、李朝時代になり、太宗4年(1404)には、『列女伝』が輸入された。

[資料23] 『李朝実録』太宗4年11月

「己亥朔、進賀使李至・趙希閔、賚帝賜列女傳・藥材・禮部咨文、回自京師、咨文曰…先蒙頒賜列女傳分散不周、再與五百部、欽此藥材・列女傳交付、差來使臣李至等、麝香二斤…古今列女傳五百部」

さらに〔資料3〕に見たとおり、太宗12年(1412)8月に忠州史庫に架蔵されている文籍には、『山海経』などのほかに、1 劉向説苑〈訳注22〉、2 白虎通、3 冊府元龜などの稗説類があったと言う。ただしこの記事にある『神秘集』がどのような文籍であったかわからないが、あるいは中国書であったかもしれないし、わが国の圖讖書であったとも考えられる。

次は成宗24年(1493年)2月丁酉の金諶の上筭(前出)には、開刊された文籍として、先に上げた『西陽雜俎』の外に、『唐宋詩話』や『太平通載』などの書名が見えており、また同年12月己丑の李克墩の啓には、

[資料24] 『李朝実録』成宗24年12月

「前監司時、已始開刊、劉向説苑新序」
〈訳注23〉

とあり、これまた『西陽雜俎』の外に、『劉向説苑新序』などの文籍が開刊され始めたとい

う。

つぎに中宗6年(1511)ごろに、蔡寿の『薛公王贊伝』が閣内に物議をかき立てたとき、大司諫の啓に(12月己丑)、『太平閑話』が見える。

[資料25] 『李朝実録』中宗38年12月己丑

「…蔡壽作薛公瓚傳、固非矣、然古亦有剪燈新話、太平閑話、乃戲玩之爲耳…」

魚叔権の『裨官雜記』によると、中宗38年(1543)に劉向の『列女伝』を国訳したというのだが、該当する『李朝実録』の記事では明確に裏付けられない(訳注24)。

[資料26] 『裨官雜記』卷4(『大東野乘』卷4)

「嘉靖、癸卯、中廟出劉向列女傳、令禮曹翻以諺文、禮曹啓請 申珽・柳沆翻譯、柳耳孫寫字…令李上佐略倣古圖而更畫之、既成…」

[資料27] 『李朝実録』中宗38年11月丙子

「大提學成世昌啓曰、東魯氏農書今見之、農桑之要備載其中、雖與我國之事似異、然亦無可法之事、但今開刊烈女傳、工役不小、事畢後開刊何如、傳曰知道」

ところで宣祖2年(1569)6月壬辰の夕講における君臣間の『三国志衍義』をめぐる話題の中で、奇大升(1527~1572)の啓中には、

[資料28] 『李朝実録』宣祖2年(1569)6月壬辰

「上御夕講于文政殿…奇大升連啓曰…又啓曰…吾儒學問中程朱之論甚是、而近來自中原流布之書不一、薛文清讀書錄亦其一也。今方印出議論亦不能無疵、學者以爲考見之資可也。近來學者以程朱之書爲尋常、而喜見新出之書、此亦多害、自上亦可知之也」

とある。

これまでもたびたび引用した許筠の『閑情録』に引用された書目は、前記した『太平広記』『世説』のほかに、次のような典籍がある。

[資料29]

高士傳	筆談	四友叢說
列仙傳	南村輟耕錄	林居漫錄
何氏語林	眉公秘笈	艷異編
事文類聚	小窓清記	耳談類林
貧士傳	容齋隨筆	避暑餘話
仙傳拾遺	臥遊錄	睽車志
問奇語林	鶴林玉露	太平清話
稗海	明野彙	玄關雜記
說郭	岳栖幽事	河南師說
張公外記	經鋤堂雜志	西湖游覽志
稗史彙編		

陶谷李宜顛（1669～1745）の文集に収められた『庚子燕行雜錄』を見ると、中国で購入したリストがあるが<訳注25>、それは次の通りである。

[資料30]

所講冊子…	黄山志（七卷）
荆川稗編（六十卷）	山海經（四卷）
三才圖會（八十卷）	四書人物考（十五卷）
名山藏（四十卷）	黃眉故事（十卷）
楚辭（八卷）	白眉故事（六卷）
西湖志（十二卷）	艷異編（十二卷）
盛京志（六卷）	國色天香（十卷）
通州志（八卷）	

李宜顛は英祖8年（1732）にも燕行しているが、その時には、

[資料31]

[所購冊子…

太平廣記（四十卷）
元文類 三國志（並 二十四卷）
古今人物論（十四卷）

を購入したとある。

正祖2年（1778）5月19日には、李徳懋が燕京しているが、その時の記事には、

[資料32] 『青莊館全書』卷67

「…燕市書肆自古而稱政欲繙閱，於是余與在先及乾糧官往琉璃廠，只抄我國之稀及絕無者，今盡錄之…

皇華紀聞	淵海
史貫傳	疏聞暑日紗
困勉錄	漁洋三十六種
池北偶談	八旗通志
博古圖	榕村語錄
重訂別裁古文奇賞	漁隱叢話
古事苑	班馬異同
笠翁一家言	帝京景物略
檜園子史英華	廣群芳譜
史科苑	
路史潛確類書	

とある。

ところで李朝時代の正祖王は国の正文・正風のために一切の雑書を廃棄しようとしたが<訳注26>、その意思のはじまりが、正祖12年（1788）8月壬辰の政廳で発表された。

[資料33] 『李朝実録』正祖12年8月壬辰

「召見大臣備局有司堂上，上曰…近來文體日益駁雜，且有貪看小説之弊…近日則經學掃地，而爲士者不過尋摘章句，爲科宦之計，外此則又有此等異學邪說，豈非大可憂歎處乎…」

こうして同王15年（1791）10月乙丑に王は宰臣たちに、明末・清初の文集や『裨官雜記』などの書冊に対する防衛策を促求した。

[資料34] 『李朝実録』 正祖王15年10月乙丑

「…予嘗語筵臣，曰欲禁西洋之學先從稗官雜記禁之，欲禁稗官雜記，先從明末清初文集禁之…卿居廟堂籌謀之地，須以明末清初文集及稗官雜記等諸册投之水火當否與諸宰爛加講究，而此若以令不便爲嫌，赴燕使行購雜書之禁，在所申明卿意云…」

その翌年の10月甲申には，文体弊風を抜本的に塞源するために，特に燕行使やその随行員たちが購入してくる雑書…稗官小説はいうまでもなく経・書・史にいたる唐板となっているものは鴨綠江を絶対に越えさせないように，強力な捜査を命令した〈訳注27〉。

[資料35] 『李朝実録』 正祖16年10月甲申

「召見冬至正使朴宗岳・大司成金方行，上教宗岳曰，昨日出一第題，設問僞書之弊，而近來土趨漸下，文風日卑雖以功令文字觀之，稗官小品之體人皆倣用，經傳菽粟之味便歸弁髦浮淺奇刻，全無古人之體，嗚殺輕薄，不似治世之聲，有關世道，實非細憂，以予矯抹之苦心至意，至有發策之舉，而若徒說其弊而未責實効則，亦何益哉，如欲拔本而塞源則，莫如雜書之初不購來，前此，使行固已屢飾，而今行則益加嚴飾，稗官小説姑無論，雖經書史凡係唐板者切勿持來，還渡江時，一一搜驗，雖軍官譯員輩如有帶來者，使即屬公于校館，俾無廣布之弊…宗岳曰，今承聖教…大哉王言，不勝欽仰，臣當嚴禁，對策萬一矣…」

王はそればかりでなく，科学に应试した者の文策にも目を光らせた。

[資料36] 『李朝実録』 同上

「上謂大司成金方行曰，泮試試券，若有一涉於稗官雜記者，雖滿篇珠玉，黜置下考，

仍圻其名，而停舉無所容貸，明日設陞會多士，而面諭此意，俾有實効…」

この文体肅正はかなり実行されたようである。

[資料37] 『李朝実録』 同上

「日前南公轍之對策中，有數句引用小品處，是誰之子…公轍知製教之啣，爲先減下，此外文臣亦多有酷好者，而姑不欲一指名，令政官詳察諸文臣中爲此體者，勿復檢擬於教授望」

この翌年，禁買雜著を再度確認する命令を下した。

[資料38] 『李朝実録』 正祖17年10月庚申

「執義宋翼孝啓，曰近來風習好奇，文體多僻，燕市購來者專取新奇文字，姑覩見嗜好，易致惑溺，請嚴加申禁，自今燕行，毋得購來，批曰，奇僻姑勿論，雖四書三經，以前出來者，溢字充棟，此所以近來申明購書之禁也。爾言際又如此，嚴飾使臣及關西道臣」

この記事にみられる四書五経というのは袖珍唐板のことである。

しかしながらこの禁買雜著はあまり効力を上げなかったようで，毎年のように同様な命令を下している。同王19年（1795）7月甲戌での崔猷重の上疏にも，履行されていない様子が伺える。

[資料39] 『李朝実録』 正祖19年7月甲戌

「…殿下右文之治果有實効乎，士趨則未免浮華，儒教則弁髦經義，而稍欲收斂者輒皆群譏，則殿下作人之化可謂有成就乎，燕市購書之禁，孰不仰弊源之照察，而西房充棟之貯，安知無奇文之並在收蓄耶，年前火其書之命，果何如，而曾未幾何猶

復習、則殿下之法紀亦可謂立乎…伏願殿下繼自今勿以聖學之已躋極工而益加自強、先從務新奇之病痛、革其習、自明末清初以來曲士所著、及小説稗記等語、涉新奇者、一切黜去、只以古今聖賢文字專事講習…矧伊奇詭邪之書正合爲灰爲燼、內府之藏凡以稗官小説爲名則並與舊在編籍、祛之丌架之間者已爲數十年、出入邇列之人莫不聞觀、但搜括私藏、秉畀炎火、恐或徒擾而令不立矣。明清曲士所著文字之內、而五部外而八域、一切黜去、無敢家置有不率…」

こうした正文運動、雑著排撃は純祖7年(1807)10月になり、つまり正祖王による正風開始以来20年後にしてやっと、つぎのような動きがみられた。

[資料40] 『李朝実録』純祖7年(1807)10月丁酉

「召見冬至正使南公轍・副使林漢浩・書狀官金魯應、辭陛也。上曰、書冊中如有可以得來者得來可也。公轍曰、既承言端、敢此仰達矣。先朝甲寅使行入侍時、有稗官小説勿爲買來之禁令、即一時矯弊之舉、而非永防書冊之教也。大抵稗官小説即是傷害世道之資、而至於經史、宜有濶狹弛張之道、我國經史板本自來不廣、如有好經史之可觀者使之勿禁、而至於稗官小説、則一切立法好矣。上曰、稗官小説異端外如經史子集中我國罕有之冊子、使之出來、又以筵教言及灣府可也。」

すなわち稗官小説および異端を除外して、前に禁止された唐板の明末・清初の経・史・子・集の将来を許可した。翌年にもそれを確認するかのような啓がでている。

[資料41] 『李朝実録』純祖8年3月壬戌
「召見吏曹判書南公轍、公轍啓言、使行書

冊之購來、自有禁令、並與正經正史而久不出來、昔日聖教出於稗官雜說之嚴禁、而並與經史、而姑令勿爲購來、昨冬既承下教、自今行正經正史及先輩醇儒文集書許其出來、異端雜書稗乘小説依、先朝法令禁之、以爲區別信令之道、請爲式、從之」

純祖王の次代になると、稗乘に対する嗜好は前と変わらず高かったという。憲宗代の李圭景の『五洲衍文長淺散稿』には、「稗官小説亦有徵補辯証說」という題目で次のように語られている。

[資料42] 『五洲衍文長淺散稿』卷45「稗官小説亦有徵補辯証說」

「世以稗官小説專歸无徵者亦爲俗見也。或有可補史牒者、虞初西陽之所錄者是已不可廢也。如廣虞初新志、新安黃永增心庵所輯、余以人借見、則其中多異聞新見、故略記可考之目…」

これに列挙された稗官小説は次の通りである。

[資料43] 『五洲衍文長淺散稿』「稗官小説亦有徵補辯証說」

馬吊牌說
杲堂集 觀縣李鄴嗣著、
野菜贊 顧景堂撰、
毛太公傳 即文龍據我假島作、
梗者錢塘 毛先舒釋黃著、
炎帝 陵歛縣江昱賓谷撰、
李自成墓 江昱著、
余文章遺事 顧景星著、
天開眼 江登雲著、
班虔額 爾德尼 江都 江德量 量殊著、
周宣靈王 江百穀著、
黃河源 江登雲著、
白帝天王 上同、

紀亂仙 薄以咸著，
此數條并可攷者也。未暇全騰其文，但記其目耳。

また同じく『五洲衍文長箋散稿』に収録された「小説辯証説」には、

[資料44] 『五洲衍文長箋散稿』卷7「小説辯証説」

漢藝文志 小説者流蓋出於稗官…街談巷語・道聽塗說者之所造也。…小説之在古可攷者有

齊諧記 (見莊子齊諧志怪者也)，

虞初志 (虞初，漢武帝時小吏，衣黃乘輜，采訪天下異聞者也)，

夷堅志 (出列子云，夷堅聞而志之)，

酉陽新組 (小西山下，穴有書千…)

諾臯記 (有引梗陽巫臯事者，遁甲中經云，他山林中呪內諾臯太陰將軍，蓋諾臯乃太陰之名，太陰乃隱神之神也…)…稗海，者取古今稗官小說函入其中，滙以爲書矣，因樹屋書影云…

謝肇淛 五雜俎，小説野俚諸書稗官所不載者，雖極幻妄无當然，亦有至理存焉…

錢塘，田汝成委巷叢談，錢塘羅貫中本者，南宋者，時人編撰小説數十種…

虞初新志，曹禾著

顧玉川傳，張潮山來評曰…

宣和遺事

楊六郎，等書，俚而无味云…

宛平王崇簡冬夜箋記，近見永川申處士，涵光荆園小語，如云每怪世人極贊，…吳郡都穆，

南濠詩話，…

點鬼簿，乃王案作，非漢卿也，…

風月須知，徐充暖妹由筆，曰風月須知一書狎游事也，不知何人所作，有娼品，狎材，狎體，狎格，狎機，狎守，勉娼七門，前序託楊鐵崖，後序託宋景廉，

皆非也…

とあり，そして「中原新出奇書辯証記」には、

[資料45] 『五洲衍文長箋散稿』卷19「中原新出奇書辯証記」

中原近日新出奇書甚多，而來于我東者亦夥如

海國圖志，數十冊

阮氏全書，又稱文選樓叢書，一百冊(阮閣老元著，字伯元，江南儀徵縣人，乾隆・嘉慶・道光・三朝出官・廣東督撫，轉至大學士)

瀛園志略，十餘冊

壽山閣叢書，一百二十冊(錢熙朝所著)

…

彙刻書目，十冊。

海國圖志 (五大州諸國事實，趙領相寅承及崔上舍漢綺收藏于家)…

此皆，海內奇書也…

と記し，雜著が健在であったことを弁論している。

[14] 本格小説

前章では，稗官小説を取り扱ったが，小説と言う名前があるものの，その実体は雜著であると言う他ない。ここで見る本格小説とは，前掲した『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』『剪燈新話』などのほかに，①『効顰集』②『嬌紅記』③『西廂記』などを列挙できるが，これらは李朝時代の燕山君12年4月壬戌の伝旨によって買來を促求されており，その中の幾つかは印進の伝教までなされた。

ところで宣祖2年(1569)の夕講では，前出した『三国志演義』のほかに，

[資料46] 『李朝実録』宣祖2年6月壬辰
「上御夕講于文政殿…奇大升連啓曰，頃日

張弼武引見時、傳教内張飛一聲走萬軍之語、未見正史、聞在三國志衍義…非但此書如楚漢衍義等書、如此類不一無非害理之甚者也…又啓曰…近來自中原流布之書不一薛文清讀書錄亦其一也」

とあり、『楚漢衍義』も話題となったようだ。

この頃になると、『太平広記』は常識的な知識となっており、『剪燈新話』のような本格小説が盛んに刊行された。奇大升の啓には、

[資料47] 『李朝実録』宣祖2年6月壬辰

「詩文詞華尙且不關、況剪燈新話・大平廣記等書皆足以誤人心志者乎、自上知其誣而戒之則、可以切實於學問之功也、又啓曰…剪燈新話、鄙褻可愕之甚者、校書館私給材料、至於刻板、有識之人莫不痛心、或欲去其板本、而因循、至今閭巷之間爭相印見、其間男女會淫・神恠不經之說亦多有之矣…」

とある。

宣祖代の沈鐸の『松泉筆談』には、先の『金瓶梅』のほかに、『肉蒲団』の名を見出だせ、

[資料48] 『松泉筆談』

「大明人物、大抵浮浪輕佻…以至著述文字、如金瓶梅、肉蒲團等書、無非誨淫之術也」

と批評する。

許筠の「西遊録跋」を見ると、すでにいくつかの中国の演義類が流入していたようで、『三国志演義』のほかに、①『隋唐演義』②『両漢演義』③『齊魏演義』④『五代演義』⑤『唐演義』⑥『北宋演義』などの戲家説＝演義を読破した痕跡があり、次のように記している。

[資料49] 『惺所覆韻藁』巻13、「西遊録跋」

「余得戲家説數十種、除三國、隨唐外而、兩漢語、齊魏拙、五代殘、唐率、北宋略、許則姦驕機巧、皆不足訓、而著於一人手、宜羅氏之三世也」

また仁祖朝代の柳夢寅(1559～1623)の『於于野談』には、

[資料50] 『於于野談』

「今年春中原新刊書七十、小説目曰鐘離葫蘆、自西湖所來、淫褻不忍親聞」

とあり、『鐘離葫蘆』という名前も発見できる。

この他に李植の『澤堂別集』には、

[資料51] 『澤堂別集』巻15、雜著

「(歷代各有演義) 演史之作、初似兒戲、文字亦卑俗…流傳既久、眞假並行…今歷代各有演義、至於皇朝開國盛典亦用誕說敷衍宜自國家痛禁之、如秦代之禁書可也」

とあり、『三国志演義』以外にもたくさんの演義類が韓国内に流布していたと推定される。このことは正祖代の李徳懋の『入燕記下』に、次のような記事があることによっても裏付けられるだろう。

[資料52] 『青莊館全書』巻67、6月2日

「…毎年使臣、冠蓋絡繹、而其所車輪東來者、只演義小説、及八大家文抄、唐詩品彙等書…」

ところで、金台俊の『朝鮮小説史』を見ると、金春澤(1670～1717)の『北軒雜説』に、

[資料53] 『北軒集』巻16

「如平山冷燕、又何等風致」

とあり、『平山冷燕』の名前も追加できよう。

また、同書に安鼎福(1712~1791)の『雑同散異』に見える小説として、『水滸伝』以外に①『牡丹亭還魂記』②『紫釵記』③『毛聲山宗岡』④『南柯夢記』⑤『邯鄲夢記』が列挙してある(『雑同散異』巻55)。

さらに先にあげた李徳懋の孫に当る李圭景の「小説辯證説」には、『水滸伝』『三国志演

義』『西遊記』『金瓶梅』『西廂記』などのほかに、①『續金瓶梅』②『芙蓉亭』③『雙渠怨』④『桃花扇』⑤『紅樓夢』⑥『續紅樓夢』⑦『續水滸伝』⑧『列国志』⑨『封神演義』⑩『東遊記』などの名が記されている。

以上がわが国の各種文献に見出だせる中国小説の韓来記事の幾つかである。

訳注

<訳注1> 李圭景は李朝の憲宗代の実学者。1788年生。卒年未詳。字は伯揆。号は五洲。本貫は完山。彼の代表的な著作には『五洲衍文長箋散稿』と『五洲書種』がある。さて『五洲衍文長箋散稿』の原本は朝鮮戦争のときに消失したために、現存していない。その写本が韓国ソウル大学奎章閣(以下「奎」と略)(請求番号…5627。58冊)と韓国国立中央図書館(以下「国立」と略)(請求番号…0160-13。60冊)にそれぞれ所蔵されている。成立年代は未詳。

<訳注2> 李适は李朝宣祖と仁祖代の武人(1587~1624)。1623年に前王であった光海君を武力で追放したクーデター、いわゆる「仁祖反正」の時の中心的メンバーの一人。しかし1624年に李适は奇益献らとともに反乱を起こし、一時ソウルを占拠した。このときの動乱によって、ソウルやその周辺に所蔵されていた多くの書籍が消失したというのであろう。

<訳注3> 訳出に当たっては、原論文にはないが、引用資料に整理番号を付けた。

<訳注4> 『古事記』応神天皇条にこれに該当する記事がある。

<訳注5> 各王朝や各王の実録や史稿および記録類の保存について、どれほどに朝鮮民族が熱意を持って、そして苦労と努力を払いつつ保存に努めたかは、今ここで詳論せず、次の論文の紹介にとどめたい。

①瀬野馬熊「李朝実録所在の移動に就いて」『瀬野馬熊遺稿』1936年、瀬野いと発行

②中村栄孝「朝鮮全州の史庫とその蔵書」『日鮮関係史の研究』(中)吉川弘文堂、1969年
ところで[資料3]の引用文中に見える「忠州史庫」についてであるが、原著者は文禄・慶長の役以前に存在した忠州・全州・星州の三カ所にあった外史庫を念頭に置いているように思われる。確かに1439年の7月に全州と星州の二カ所に、いわゆる「実録閣」が建設されたが(『李朝実録』世宗21年7月己酉の条)、その時に同時に忠州にも「実録閣」が設けられたかは不明である。ただ1473年には明確に存在していた(『新增東国輿地勝覧』巻33、全羅道、全州府、宮室、実録閣の条)。1432年にできた『世宗実録地理誌』巻149、忠州牧の条には、「史庫」が「客舎の西にある」と記述しているが、我々が問題としている太宗12年(1412)当時の「忠州史庫」はそれとも違い、忠州の開天寺にあった。開天寺に「忠州史庫」が設置されたのは1381年7月であったが、この「史庫」にどのような典籍が架蔵されていたかは不明であるとはいえ、1402年にここにあった仏書が観集寺に移送されたとあり(『李朝実録』世宗7年6月庚子の条)、しかも1404年6月に史官が都から派遣されて曝麗を行ったとある(『東文選』巻93、送忠州曝麗別監吳奉教先敬詩序の条)。さらに1421年の正月には、世宗が「忠州史庫」の書籍簿を見て蔵書を取り寄せたとあるが、残念ながらこの書籍簿は現存していない。

なお韓国ソウル大学校の奎章閣に所蔵されている『史庫形止案』と呼ばれる報告書を見ると、

史庫にあった蔵書の総目録が判明するものの、「忠州史庫」の『史庫形止案』は伝わっていない。しかしながら幸いにも現存最古の『史庫形止案』は、万曆16年（1588）戊子9月1日付の『全羅道全州史庫曝麗形止案』（請求番号一奎章閣10002）1冊（6張）が伝来しており、またこれと同じ奎章閣に所蔵される1591年から1906年までの260冊に及ぶ『史庫形止案』によって（訳注者はこれらの『史庫形止案』調査をすべて完了しているが、調査結果の報告は後日に譲りたい）、消滅した「忠州史庫」の蔵書目録を推定するしかない。もちろん〔資料3〕によって、その一部は推測され、また『李朝実録』太宗12年4月丁巳の条から『大宋頒樂図』4通や、同じく太宗12年6月乙亥の条から『陰陰書』20帙等が所蔵されていたことも知られる。

〈訳注6〉 朝鮮古代三国時代の著作である、金大問（新羅の聖徳王代の人）の『鷄林雜伝』『花郎世紀』や崔致遠（857～?）の『新羅殊異伝』などの作品は現存していないが、最近韓国内で『花郎世紀』の筆写本が発見されたとの報道に接した。筆写本の複印などを入手していない段階で軽率にその信憑性に触れられないので、ここでは報道の紹介に止めておく。

なお、朝鮮文学研究の先駆者である金台俊（1910～1945）は表題から判断して、『鷄林雜編』は唐の蘇号鳥の『杜陽雜編』、『新羅殊異伝』は晋載祚の『甄異伝』、晋の祖冲之の『述異伝』、同じく晋の劉敬叔の『異苑』、漢の東方朔の『神異伝』からの影響関係を推定している（金台俊『朝鮮小説史』ハンギル社、1990年、P33）。

〈訳注7〉 「中国小説史略」第4章『魯迅全集』第9巻、pp173～200、人民文学出版社、北京、1973年（訳文『魯迅全集』第11巻、pp61～113、学習研究社、1986年）

このリストの中の文籍の幾つかは韓国にも伝来しているが、留意しておくべき文籍の一つが、「国立」所蔵の『西京雜記』（請求番号…古2209—11。6巻1冊）である。

〈訳注8〉 この時に将来された書籍は、総数127種、約5000巻に達する。なお、これより少し後のことであるが、睿宗8年（1113年）2月には、

「耶律固等、将還、請春秋釋例・金華瀛洲集、王賜各1本」（『高麗史』世家、巻13、27B）とある。

また中国の陳繼儒の『太平清話』巻上には、

「朝鮮人最好書、凡使臣到中土、或限五六十人、或旧典、或新書、稗官小説、在彼所欠者、五六十人、日出市中、各寫書目、分頭遇人偏問、不惜重值購回、故彼国反有異蔵本也。」

とあり、朝鮮人の好書傾向が記されている。

〈訳注9〉 1536年に刊行された朝鮮本『文苑英華』の零本（巻334～335の20張）が「国立」（請求番号…貴重本559。1冊）に有り、またこれと同一版本の零本（巻201～205）が高麗大学校図書館華山文庫（請求番号…貴重本157。1冊）に所蔵されている。共に丙字本。

〈訳注10〉 成俔（1439～1504）の『慵齋叢話』からの引用記事に記載された「伯氏文安公」を原著者は「成和仲」に該当しているが、明らかな誤解である。

この『慵齋叢話』の記事が信頼するに足る証拠に、「国立」に1冊（巻14～19、請求番号 貴—283）と、「誠庵文庫」に2冊（巻15～21、請求番号 4—1433）、それぞれ木版本が所蔵されている（李承召の『三灘集』十巻を参照）。しかしながらこの2冊は同版ではなく、別の版である。もっとも『攷事撮要』を見ると、草溪と晋州に版木が保存されていたとあり、上の2冊はどちらかで刊行されたものであるに違いない。今後の調査に待ちたい。

なお成俔は字聲叔、号は慵齋。李朝中宗代の名臣。『慵齋叢話』10巻には、各巻約30条の記事を収録し、その総数は316条である。ソウル大学校奎章閣に3巻3冊の写本が残されている（請

求番号 奎7132および6905)。李朝初期から燕山朝までの政治・文化・地理をはじめとして俚談風俗にまで筆が及んでいる。本書巻10の「景福宮西辺慶会樓池水」の項目を見ると、その記事に「同上己未年」とあり、成俔が逝去する2年前まで執筆していたようである。したがって〔資料13〕は15世紀末の著者の実見聞にもとづくものと考えられる。

〈訳注11〉 このときに輸入したものかどうか今後精査する必要があるが、「国立」に中国木板本(請求番号…古3739。20巻4冊)が所蔵されている。

なお成宗代に刊行された朝鮮本『西陽雜俎』は、管見の範囲内では『唐段少卿西陽雜俎』の表題で「誠庵文庫」に10巻1冊本の1冊(巻11~20)と8巻1冊本の1冊(巻12~15, 巻17~20)が伝わっている。もつとも両書とも成宗23年(1492)の刊行年が付けられている。また『東京雜記』巻3の書籍条を見ると、「慶州府蔵冊板」の項目にこの本の名があり、「誠庵文庫」本の『唐段少卿西陽雜俎』はこの慶州で刊行されたかもしれない。

〈訳注12〉 「国立」所蔵の木活字本は12巻6冊である(請求番号…ハン—48—224)。また3巻本の『世説新語』がソウル大学図書館に零本(1冊)であるが、現存する(請求番号…古920.052—Y91s—v2)。

〈訳注13〉 巻首に萬曆丙戌(1586)と記す朝鮮本『世説新語補』20巻7冊が「奎」(請求番号…1801-2072)と「山気文庫」(李謙魯氏所蔵)に所蔵されている。

なお、許筠の『閑情録』は写本でのみ伝来しており、今「国立」に所蔵されている。18巻3冊(請求番号…古1570—11)。そしてこの『閑情録』には、『明世説新語』を24条、『世説新語補』を4条引用している。

〈訳注14〉 当時、いかに広く『三国志演義』が読まれたかは、次の通りである。

①金万重『西浦漫筆』下巻

「今所謂三國志衍義者、出於元人羅貫中、壬辰後、盛行於我東、婦孺皆能誦說…李彝仲爲大提學、嘗出風雪、謗草廬二十韻排律、以試湖堂提學士、余謂令公、何以演義出題李笑曰、先主之三顧、實在冬月、其冒風雪、不言可知矣」

②李翼『星湖塞說類選』

「在今印出廣布、家戶誦讀、試場之中、學而爲題、前後相續、不知愧恥、亦可以觀世變矣」

〈訳注15〉 『三国志演義』が朝鮮の軍談小説にどのような影響を与えたかに関して賛否両論あるが、

①丁奎福「韓国軍談小説に与えた『三国志演義』の影響序説」『国文学』第4集、高麗大学校国語国文学科、1960年

②李在秀「『三国志演義』と軍談小説…『三国志演義』がわが国の小説に与えた影響」『韓国小説研究』宣明文化社、1969年

③李慶善『三国志演義の比較文学的研究』一志社、1976年

④李慶翊「韓・中小説の比較文学的研究…軍談小説と『三国志演義』」『韓国古小説研究』二友出版社、1983年

などの研究によって、人物描写・舞台背景・陣陣法・文体などの多角的な面にわたる比較文学的検討がなされ、朝鮮の軍談小説の成立に与えた影響は簡単に否定できないと思われる。それでも本論文の原著者である李能雨や徐大錫などは、両者の影響関係を否定的に捕らえている。

⑤徐大錫「軍談小説の出現動因反省」『古典文学研究』第1号、1979年

〈訳注16〉 『趙雄伝』『劉忠烈伝』などの一連の作品は、英雄小説とも軍談小説とも呼称されるジャ

ンルに属するが、これらの作品に一貫するモチーフは、金起東が指摘するように、「君主国家において、儒教的人生観から生まれた功名主義を表現した」（金起東『韓国古典小説研究』教学研究社、1983年、P344）ものである。

ちなみに軍談小説として列举された小説の中で、李朝時代に遡る木版本も活字本もあるいは筆写本も現存せず、『權益重伝』は1926年の活字本（博文書館版）、『林虎隠伝』は1915年の活字本（唯一書館版）、『張国振伝』は1916年の活字本（東亜書館版）だけがテキストとして知られていることに注目を喚起したい。かって訳注者はこうした小説群の成立を問題とした考察の中間報告の中で、これらの小説を李朝古典小説と認定することは、ある程度の留保条件をつけなければならないと主張し、むしろ成立が日本統治期にまで下る作品もあると論じたことがある（松原孝俊「二、三の朝鮮古典小説に対する疑問点について」朝鮮文学研究会月例会、1991年10月）。

蛇足であるが、リストの中で『劉忠烈伝』、『李大鳳伝』、『大成龍門伝』などは完板本（全羅道全州で作成された坊刻本）のみが知られており、むしろ完板本の無名の作者の執筆傾向をも踏まえた上で、今後は検討すべきであるまいか。

<訳注17> この「洪吉童伝」は、すでに指摘されてきたように、李植（1584～1647）の言に、「世伝作水滸伝人、三代聾啞、受其報応、為盜賊尊其書也。許筠・朴華等、好其書、以其賊將別名、各点為号以相譏、筠又作洪吉同伝以擬水滸。」

（『澤堂先生別集』「雑著」巻15、22張）

とある。

<訳注18> ただしこの出典箇所に関して、原著者は『惺所覆韻藁』にあると指摘するが、『閑情録』の明白な間違いである。

<訳注19> この李能雨の指摘は正確でなく、太田辰夫が論じたように、「朴通事諺解」（1677年刊行）に元時代の平話『西遊記』が本文で関係有るもの2話（第80話と第88話）と、註で関係あるもの8条が引用されている（太田辰夫『朴通事諺解』所引西遊記考』『西遊記の研究』研文出版、1984年）

なお言うまでもないが、『西遊記』成立に関する魯迅の見解（同書訳文 pp278～311）を李能雨は誤解している。

<訳注20> 李朝時代の儒学者たちがいかに激しく中国小説を中傷したかは、次の例によってもその一端を知るに違いない。

①「演義小説、作奸誨淫、不可接目、切禁子弟、勿使看之、或有対人、女尾女尾誦説、勸人読之者、惜乎、人之無識、胡至於此」（李徳懋『青莊館全書』「士小節」巻3）

②「『金瓶梅』『紅樓夢』等小説、不可使新学少年律己君子読也」（趙在三『松南雜識』稽古類、西廂記条）

<訳注21> 柳鐸一によれば、李能雨の指摘よりも早くに、金時習の七言古詩の題名に「題剪燈新話後」と見え（『梅月堂詩集』巻64）、その詩が、

「金翠墓前溪山麓

羅趙宅中苔草細

聚景園外荷香馥

秋香亭畔月色白」

とある。そしてこの詩の中には『剪燈新話』に収録された金翠の『翠翠伝』、羅趙の羅は「愛卿

伝」の羅愛愛、趙は「緑衣人伝」の趙原、聚景園は「藤穆醉遊景園記」、秋香亭は「秋香亭記」がそれぞれ歌い込まれていることから考えて、また金時習が『剪燈新話』の影響下にあつて『金鰲新話』(1465~1471年の間に成立か)が作り出されたことを考慮して、それ以前に『剪燈新話』が朝鮮半島に流入していたと推定している。しかも袁行霈・侯忠義の研究(『中国文言小説書目』北京大学出版社、1981年)を参照しながら、『剪燈新話』には、

- ①洪武11年(1378)『剪燈録』40巻
- ②永楽本(1421年)以前の坊間刊行本
- ③永楽正統年間(1421~1442)瞿暹の杭州刊本
- ④明・成化丁亥(1467)刻本
- ⑤清・乾隆56年(1791)刻本
- ⑥清・同治10年(1871)鎮江文盛堂刊『剪燈叢話』本均2巻
- ⑦1917年董氏誦芬室重刻本4巻、各本均付
- ⑧1957年上海古典文学出版社、周夷校注本

の8種があると明らかにした上で、柳鐸一は日本の東洋文庫に架蔵されている次の朝鮮本(請求番号: XI-4-B-31)に注目する。

『剪燈新話』上下2巻2冊、題「錢塘瞿佑宗吉著」、四周双辺、黒口(間有白口)内向黒魚尾、11行22字、上巻(38張)下巻(37張)跋(2張)、刊記「姪瞿暹刊行」

この朝鮮重刊本によって少なくとも上記の③の『剪燈新話』が朝鮮半島に流入していたことは確実である(柳鐸一「『剪燈新話』『剪燈余話』の韓国伝来と受容」『茶谷李樹鳳先生回甲紀念論叢古小説研究論叢』茶谷李樹鳳先生回甲紀念論叢刊行委員会、1988年、291~309頁)。

なお『韓国冊板目録総覧』(鄭享愚・尹炳泰編、韓国精神文化研究院、1979年)を見ると、この『剪燈新話』の刊行は、

「北漢山城・保寧・密陽・永川・陝川・居昌・全州・順天・龍安・濟州・原州」

などの広い地域で行われたことが分かる。中国では正統7年(1447)に禁書になったのにも拘らず、朝鮮半島では僧侶をはじめとする幅広い読者を獲得した。それは柳得恭(1748~1801年)の『京都雜志』巻1に、「閩巷最愛剪燈新話、以其助於吏文也」とあることによっても裏付けられる。

『剪燈新話』が東アジア文学に与えた影響を論じた、主な参考文献は次の通りである。

- ①朴成晟「比較文学的見地から見た『金鰲新話』と『剪燈新話』」『高麗大学校文理論集』第3輯
- ②佐藤俊彦「剪燈新話・伽婢子および金鰲新話の比較研究」『朝鮮学報』第23輯
- ③韓栄煥「『剪燈新話・金鰲新話・伽婢子』の比較考察」『パンソリ・古典文学研究』姜漢永教授古稀紀念論文集刊行委員会、亜細亜文化社、1983年

ところで李能雨は言及していないが、中国の李禎の著『剪燈余話』についても紹介しておきたい。この本は永楽2年(1420)に初刊本が上梓され、その後1433年に張光啓刊行本が生まれている。朝鮮半島への流入時期は明確ではないものの、李朝時代の世宗27年(1445)に完成した『龍飛御天歌』巻10には、

「剪燈餘話曰、五代之亂、古所未有、不有英雄起而定之、則亂何時而已乎、圖南窺見其幾有志大事、往來關洛、豈是浪遊、及聞趙祖登極、墜驢大笑、故有「屬猪人已著黃袍」之句、就已字觀之、蓋可見矣、既而拂袖歸山、白雲高臥、歸花啼鳥、春色一般、遠引高騰、不見痕跡、

所謂寓大巧於至拙，藏大智於極愚，天下後世，知其爲神仙而已矣，知其爲隱者而已矣，孰得而窺其突突。」（『龍飛御天歌』卷10，9JB）

とあり、『剪燈余話』巻2を引用している。これによって1443年以前に朝鮮半島への伝来を知ることができる。そしてこの『剪燈余話』は朝鮮半島の全羅道淳昌で朝鮮本が刊行されている（『巧事撮要』）

<訳注22> 『巧事撮要』によると、『劉向説苑』は韓国の安東に冊板があつたと教える。1575年に刊行された安東版の朝鮮本『劉向説苑』は、「誠庵文庫」（5巻1冊，巻6～10）に伝来している。この系統の書籍は韓国慶尚道の奉化郡の金斗淳氏（3巻3冊）や禮泉郡の李虎柱氏（2巻1冊）等も所蔵している（『韓国典籍総合調査目録』第1輯，韓国文化財管理局，1986年）。

<訳注23> この時に刊行された『劉向説苑新序』と推定される本が、「誠庵文庫」（5巻1冊，巻6～10）に伝わる。

<訳注24> 同じ『列女伝』でも，明代の解縉らが1403年に編纂した『古今列女伝』の朝鮮半島への流入は，李朝時代の太宗4年3月（1404）の条に，

「欽賜曆日書籍事，永樂二年大統曆一百本，古今烈女傳一百一十部…」（『李朝実録』）

とあり，同年の11月己亥に，

「十一月，己亥朔，進賀使李至・趙希閔・賚帝賜列女傳，樂材，禮部咨文，回自京師，咨文曰，欽奉，聖旨朝鮮國王，缺少樂材，差臣來這裏收買，恁禮部照他買小的數月，關與他持去，與王用來的使臣告説，先蒙頒賜列女傳，分散不周，再與五百部，欽此樂材，列女傳交付，差來使臣李至等，麝香二斤，朱砂六斤，沈香五斤，蘇合油一十兩，龍腦一斤，白花蛇三十條，古今列女傳五百部…」（『李朝実録』）

の記事が見える（禹快濟「列女伝の教訓書受容考察」『茶谷李樹鳳先生回甲紀念論叢古小説研究論叢』茶谷李樹鳳先生回甲紀念論叢刊行委員会，1988年，433～464頁，参照）

<訳注25> 入燕使臣たちが如何なる中国文化を導入しようとしたかに関するアウトラインは，

金聖七「燕行小考」『歴史学報』第12号，1960年

に略述してあり，また正祖朝に入燕使臣たちが輸入した中国典籍に関しては，

藤塚隣「李朝の学人と乾隆文化」『朝鮮支那文化の研究』

を参看されたい。

<訳注26> 正祖王の文教政策については，詳しくは

①高橋亨「弘齋王の文体反正」『青丘学叢』第7号，1932年

②末松保和「正祖朝と古今図書集成の伝輸」『青丘史草』第2，1966年

③鄭亨愚「朝鮮後期の文教政策と書籍編纂事業」『朝鮮時代書誌史研究』韓国研究院，1983年の3編の論文に譲りたい。

<訳注27> 裨官小説などの輸入を禁止したばかりでなく，正祖王は『水滸伝』や『西廂記』等の小説を強く攻撃している。其の理由の一つは，

「近日，嗜雜書者，以水滸伝似史記，西廂記似毛詩，此甚可笑，如取其似而愛之，何不直讀史記毛詩」

（『弘齋全書』巻163，日得録，文学，3）

であり，

「或言燕肆買書之禁，蓋爲裨官小説，蟲人心術之類，如經傳子史之裨益治教者，不宜混禁，予意殊不然，我東，曷嘗無經傳板刻，特以其卷帙樸大，不便臥看，故邇來儲書家，必求唐本，甚至板有袖珍，床有臥看，即此一事，便是侮經，侮經之弊，必入於異端曲學，雖欲不禁得乎」

（『弘齋全書』卷165，日得録，文学，5）

だからであった。しかしながら正祖5年までに輸入された中国典籍は相当な数に達していたとある。それは次の記事からわかる。

「撰訪書録2巻，使内閣諸臣，按而購買，凡山海志秘謀稀種之昔今有者，無慮数千百種」

（『李朝実録』正祖5年6月庚子）

【付記】

本稿は、韓国淑明大学校国文学科教授であった李能雨先生（1920年～）の論文「中国小説の韓来記事」（『淑明女子大学創立30周年記念論文集』1968年，pp53～71）の翻訳である。この翻訳は、ある中国研究者との談話をきっかけにして行ったものである。というのも、日本の中国研究者たちは朝鮮半島に伝来した中国文献に関してほとんど知識を持っていないと聞いたからである。東シナ海を囲んで同じ漢字文化圏でありながらも、日本人研究者のみならず、おそらく中国人研究者までもが朝鮮での中国文献の受容に関する知識を全く保有していない現状を、一人の朝鮮学徒として寂しく思うものである。本翻訳によって、朝鮮半島の知識人がいつ、いかなる経路で中国小説をどのように理解したかなどについて、いささかでも日本の中国小説研究者の視線が朝鮮半島に向き、朝鮮に伝来する関係文籍に関心を抱いていただく一助となるならば、望外の幸せである。

ただし本稿は正確に言えば、完訳と言うより抄訳である。それというのも原論文には引用の重複のみならず、論旨の錯綜、さらには本論と無関係な「比較文学論」の展開が唐突にあったり、いわば論旨に脱線甚だしく、原論文どおりに翻訳しても徒に混乱を招くだけであると判断したからである。しかも部分的に原著者の誤解や引用の間違いなどがあったために、明白な誤りについては翻訳者の責任の範囲で訂正に努めたり、また論旨の整合性をとる上で引用を整理して提示した箇所もあることを明らかにしておきたい。

確かにそうしたケアレスミスなどが散見するとは言うものの、この論文の価値はいささかも低められることはない。その理由は、論文が発表されてから早や30年近く過ぎた現在でも、この論文を越える綿密な調査をした「中国小説の韓来」関係記事が収集されていないからに他ならない。もっとも関連する論文が皆無であったと言うわけでもない。

①李鐘殷「中国小説が韓国小説に与えた影響」『延世大学校大学院碩士論文』1950年

②丁來東「中国小説が韓国小説に与えた影響」『国語国文学』（韓国国語国文学会）第27号，1964年

などがなくはないが、本論文の視界の広さに勝るものはない。

今後、この分野の研究の深まりを期待するとともに、翻訳者も近い将来に、朝鮮に伝来した後、中国では散逸してしまった典籍、例えば『翰苑』などの調査報告の発表を約束しておきたい。

なお、李能雨先生の年譜と御業績は、先生の古稀を記念して編集された『千峰李能雨博士七旬記念論叢』（同刊行委員会，1990年）pp 3～5に紹介されている。

最後に本学の日下翠先生からは数多くの教示を得たことを特記し感謝申し上げるとともに、原著者の李能雨先生の一日も早いご快癒を祈りたい。

역주 「中国小説類의韓来記事」

原著 李能雨
編集・翻譯・訳注 松原孝俊

본고는 이능우씨가 쓴 논문「中国小説類의 韓来記事」의 번역에 역주를 붙인 것입니다. 원논문은 중국소설이 언제, 어떤 경로로 조선반도에 유입되었는가를 고찰한 것이지만, 역주에서는 지금 어느 도서관에 어떤 중국 문헌들이 현존하고 있는가, 그리고 중국문헌을 복인한, 조선본에 관한 조사 결과를 논술했다.